

自己を見つめる力を伸ばすキャリア教育と自立活動

—各教科等に自立活動の6区分と合理的配慮を意識して取り組む学校経営の視点から—

特別研究員 佐々木 貴美（川崎市立御幸中学校）

要 約

本研究では、一人一人に応じたキャリア形成にむけて合理的配慮を踏まえ、自己を見つめる力を伸ばすキャリア教育と自立活動との関連から授業デザインを考え、教育課程の編成に資する特別支援教育の専門性を高める学校経営のモデルを検討した。研究1では各教科等に自立活動の6区分を意識した授業の工夫によるキャリア教育の在り方を考え、自立活動と合理的配慮の観点から踏まえた授業例の分類表を作成し、教材や言葉かけの工夫に取り組んだ。研究2では、川崎市の小学校、中学校、特別支援学校の管理職の意識調査を通して、自立活動に関わる現状と課題を明らかにし、2008年度に川崎市立学校の管理職の質的調査によって生成された特別支援教育の資質向上モデルを元に、健康生成論の中核概念であるSOC（首尾一貫感覚）を教職員の資質の基盤とする仮説から、自立活動と合理的配慮の観点からインクルーシブ教育に向けて特別支援教育の専門性を高められるような児童生徒一人一人のニーズに合った指導と支援ができる学校経営のプロセスモデルを作成した。これらの結果から一人一人の進路に応じたキャリア教育として、障害や困難を改善・克服する力を自然に身に付けられるような各教科等に自立活動を意識した授業研究を積み上げて教育課程を編成することが必要であり、それは学校経営のプロセスに影響されることが示唆された。

キーワード：キャリア教育、自立活動、学校経営、教育課程、合理的配慮、首尾一貫感覚

目 次

I 主題設定の理由	79	(2) 「自己を見つめる力」とは?	85
1 はじめに	79	(3) 自立活動6区分と合理的配慮の授業	85
2 自立活動とは何か	79	(4) 有効な手立て・教材・授業方法	88
3 キャリア概念とは	80	5 研究の実際その2 <研究2>	
4 思春期のキャリア発達の様相	81	特別支援教育の専門性を高める学校経営	
5 なぜ学校経営にキャリア教育と自立活動		モデルの開発	89
が必要なのか	82	(1) 調査の目的	89
II 研究の内容	83	(2) 調査の方法	89
1 研究の目的	83	(3) 調査の結果	90
2 研究の意義	83	III 研究のまとめ	94
3 研究の方法・構成・仮説	84	1 研究から見てきたこと	94
4 研究の実際その1 <研究1>		2 今後の課題	96
自己を見つめる力を伸ばすキャリア教育	84	参考文献	97
(1) 「自立活動を意識した授業」とは?	84	指導助言者	97

I 主題設定の理由

1 はじめに

中学校の時期は、様々な葛藤や経験の中で、自分の生き方を模索し、夢や理想を持つ時期であるとともに、現実的な進路の選択を迫られ、自分の意思と責任で決定しなければならない時期でもある¹。

下村光吉²は「自分は将来どのように生きてゆこうか、と考え、自分のあるべき姿を求め、そして現在どんな努力をしたらよいかをつかみとる。この主体的な努力を大切にさせようとする指導そのものこそ進路指導の命題」であり、「変動する社会の中で正しく自己を生かすことができるようなしっかりした人生観・職業観・勤労観を、進路と結び付けて自覚させ、指導・援助してゆかなければならない」と考えた。これは、現在でも日々生徒と活動を共にしている教師の思いと同じである。

社会の中で生きていくときに障害があると生活や学習に困難を生じる。そのため特別支援学校には、「生活や学習上の困難を改善・克服する力」を養うために、自立活動が教育課程に位置付けられている。通常の学校に在籍する生徒であっても障害の有無に関わらず、社会自立に向けては誰しもが障害や困難を改善・克服する場面に出会う。特に思春期には体も心も成長し、様々な状況の中で、自己選択、自己決定、自己責任の伴う判断を迫られ、様々な障害や困難を乗り越えていかなければならない場面が多い。だから、学校教育の中で一人一人の将来を見据えて自己を見つめる力を伸ばすキャリア教育として、各教科等に自立活動を意識した授業デザインや教育課程の編成、特別支援教育の専門性を高めるための方向性について学校経営の視点から考えたいと思った。

2 自立活動とは何か

自立活動とは、「特別支援学校小学部・中学部学習指導要領 第7章 自立活動」に定められた領域のことで、特別支援学校の幼児児童生徒に対し、様々な困難を改善・克服するための指導を行い、人間として調和のとれた育成を目指すために設けられている。「健康の保持」「心理的な安定」「人間関係の形成」「環境の把握」「身体の動き」「コミュニケーション」の6区分26項目がある。「健康の保持」には自己の健康に対する理解や意識が含まれ、「心理的な安定」には障害や困難への克服が含まれる。また、「人間関係の形成」や「コミュニケーション」はキャリア教育の「人間関係形成能力」と重なり、「環境の把握」や「身体の動き」は感覚や認知、運動面についての項目であり発達において重要な部分である。つまり、自立活動は、生徒一人一人の発達課題に応じて乗り越えなければならない課題に対し、健やかなキャリア発達を促進するために取り組むことになる。自立活動の前身は、昭和46年の学習指導要領改訂によって、通常の学校の学習指導要領には含まれない部分として生まれた「養護・訓練」が始まりである。平成11年から「自立活動」という名称に変更され、現在に至っている。

自立活動は通常の学校の教育課程には位置付けられていないため、自立活動の時間が確保できない難しさがある。しかし、特別支援学校学習指導要領解説自立活動編(幼稚園・小学部・中学部・高等部)(以下、自立活動編と略す)には、特別支援学級在籍や通級による指導において「『自立活動』の内容を取り入れるなどして、実情に合った教育課程を編成する必要があること」、「通級による指導の対象とはならないが障害による学習上又は生活上の困難の改善・克服を目的とした指導が必要となる者がいる」ため、自立活動編に示した「内容を参考にして適切な指導や必要な支援を行うことが望まれる」と明記されている。例えば、「身体の動き」について、徳永豊³は、機能訓練と教育活動の視点に分けて捉え、教育活動の場合は、「自らの身体をどのように把握し、自らの身体をどのようにコントロール

1 文部科学省 『中学生のキャリア教育の手引き』 2011年 p.26

2 下村光吉 「職業観・勤労観の育成と進路指導：仕事に対する意識の一研究と実践を通して」 進路指導研究 1981年 pp.1-6

3 徳永豊 『肢体不自由のある子どもの自立活動の手引』 独立行政法人国立特殊教育総合研究所 2006年 p.21

するか、自らの身体を操作して外界にどのように働きかけるかの問題であり、その活動の基本は課題解決であり、学習活動になる」とし、それは「指導者との共同活動であり、コミュニケーションが前提になり、教員の言葉かけや子どもがどのように応じるかを確かめ、そのコミュニケーションの質を高めていくことが重要な教育活動である。その活動に期待や不安が伴い、それを子どもが自ら調整することで、教員との信頼関係を形成することにもつながる」と説明している。自立活動は学校教育全体を通して長期に渡って一人一人のキャリア発達に必要な学習活動である。

3 キャリア概念とは —「キャリア」と「働くこと」—

キャリア教育⁴とは「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」とであると定義されている。人が生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ねを「キャリア」とし、社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程を「キャリア発達」と定義している。障害の有無に関わらず、すべての子どもに当てはまる定義である。そのキャリア教育の中核である「基礎的・汎用的能力」として「人間関係形成・社会関係形成」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の4つがあり、各学校が創意工夫をして「社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度」を育成することが求められている。インクルーシブ教育での「基礎的・汎用的能力」が重度重複障害のある子どものキャリア教育の中核となり得ることがユニバーサルなキャリア教育となると思われる。K. B. Hoyt は、学校の教室も「働き場」(work place)、生徒も教師も「働く人 (workers)」とし、自分の行動は自分と他人のためであり、それを達成したいと願う人間の欲求を示す事例が「働くこと」とであると捉えた⁵。藤田晃之は、「多様で豊かなライフ・ロールを切り捨て、『働くこと』に焦点を当てて、そのためのスキル教育を中核とすることには違和感が残る」⁶と指摘する。Hoyt も藤田も「働くこと」という概念は賃金を得るための労働行為だけではなく、人と人との関係性の中に位置づく価値ある行為として考えている。これらは学校教育における学級の中で一人一人の個性が生きてその中で役割を果たすことにつながる考え方であり、重度重複障害のある子どもたちにとっての「働くこと」という意味を広くとらえることができる考え方である。今日のキャリア教育において「働くこと」の意義や意味に対し「在り方生き方教育」の視点から捉えることにもつながるのでないだろうか。渡辺三枝子はキャリア概念に内包される4つの概念として、①人と環境の相互作用の結果②時間的な流れ③空間的な広がり④個別性をあげ、キャリア意識が形成されていくときにこの4つが相互に関連し合っているとしている⁷。時間的な流れを意識することは、将来の目標と今の自分の行動を結びつけるためにも必要なことである。

キャリア概念とは一人一人に固有であり、時間・空間・人と環境の相互作用の中で、様々な経験が織りなす個別性の高い世界観なのではないだろうか。キャリア教育の根幹には、competency-based⁸の理念が流れているので、キャリア教育と自立活動の理念は重なり合うものだと考えられる。

4 前掲書1 pp.14-25

5 Kenneth. B. Hoyt. 『Career Education : History and Future. キャリア教育—歴史と未来』(仙崎武, 藤田晃之, 三村隆男, 下村英雄訳. 東京, 社団法人雇用問題研究会, 2005年 pp.73-74

6 藤田晃之 「<研究室だより>社会人(オトナ)学を学校へ」筑波フォーラム71号 pp.140-144. 2005年

7 渡辺三枝子編著. 『新版キャリアの心理学 キャリア支援への発達のアプローチ』東京, ナカニシヤ出版, 2010年 pp.12-16

8 渡辺三枝子は『職業教育及び進路指導に関する基礎的報告書(最終報告)』(1998)の中で「competencyとは一般に能力と訳されるが、『ある課題への対処能力のことで、訓練によって習熟するもの』という意味を内包している。語源を探るとラテン語のcompetoであり、『一緒に追求する、共同で得ようと努力する』とか『あることをなすことができる、資格がある、十分間に合う』との意味である。この言葉を用いる背景には、『できるかどうか』、『可能性があるかどうか』という個人の現能力を重視する姿勢ではなく、『訓練で習熟させられる』、『一緒に努力すればできるようになる』という『育成』の姿勢がある。つまり『自己を知る』ためには、人間関係能力、情報収集能力、葛藤処理能力等が役に立つ。言い換えれば、一つの力を習熟すれば他の力も身につけやすいし、発達するということである。ちなみにcompetentとは『自信がもてる』ことである。児童生徒が『やればできると感じ、自信がもてるようになる』ことがcompetency-basedの効果であるといえるであろう。(p.90)」と記している。

4 思春期のキャリア発達の様相

思春期のキャリア発達の様相として、15年ほど前に中学生の悩みや困ったことのある場合の対処行動に関して、他人へ支援を求める生徒は健康が良好なことが多く、自己コントロールする生徒は支援を求めないため、問題が潜在化しやすいこと⁹が明らかにされた。2010年には中学生の悩みは「勉強」が中心であり、悩んだときの対処行動として、他者へ相談、自分で解決、努力して乗り越えるという積極的対処法を行う生徒、何もしないで我慢する、寝てしまう、パソコンや携帯メールをするといった消極的対処法を行う生徒の状況があること¹⁰、2012年の中学生と高校生のキャリア意識を理解するために実施された「中学生にとって大切なことアンケート」¹¹では、生徒の自己評価によるキャリア意識には、社会性、健康意識、職業意識、目標達成行動、人間関係の形成、自立活動的な要素の存在などが明らかにされた。これらの結果は、20年以上前の東京都の定時制高校生における生活習慣と健康意識の関連を明らかにした研究¹²と類似していた。さらに、1950年代にも内的適応の仕方が社会適応に関連することを糸賀一雄ら¹³がすでに明らかにしていることや、当時の知的障害のある中学生への教育目標が「職業的陶冶・社会性の涵養・健康管理」であったことから、時代を超えて思春期の生徒に共通する課題は変わっていないことを示唆するものであった。

「中学生にとって大切なことアンケート」¹⁴の中では、①「中学生で身につけることは何か」②「高校生で大切なことは何か」③「働くために大切なことは何か」④「将来に向けてすべきことは何か」⑤「苦手なことがあったときにどうするか」という調査がされた。思春期の生徒の素直な言語表現によって、夢や希望に向かって努力する姿や経験を生かして次のステップに進もうとする姿、悩みや困難から逃げたい気持ちの葛藤などが表面化するなど、中学生・高校生の思春期のキャリア発達の様相が明らかにされ、中学生から高校生へのキャリア形成途上では、自己評価のあり方や経験の意味づけの仕方が将来への生き方やキャリア形成に影響を与えることが示唆された。また、中学生の「苦手なことがあったとき」の対処方略として「自分で克服」「他者へ支援依頼」「気分転換」「逃避」の特徴が表れ、「自分で克服」「他者へ支援依頼」の生徒について、「働くときに大切なこと」に対する自由記述の言語表現の特徴として、「自分で克服」群は「相互交渉」「責任ある行動」「必要とされる行動」など積極的に前面に出て動くような言葉が表現され、「他者へ支援依頼」群は「傾聴」「役に立つ行動」「働く苦労や大変さを知る」など相手意識の強い言葉が表現されるなど、基本的な姿勢として職業観、勤労観など生き方に関わる価値観の相違が明らかになった(図1)。さらに、中高生の間では自己評価によって、将来に向かう気持ちを表現する言葉に違いが見られ、自己評価の高い特別支援学校高等部生や定時制高校生は、「生かす・切り替える・逆境・向上心」という困難を乗り越えるような言語表現が見られた¹⁵。これらの結果から対処方略の違いもキャリア発達に影響していることが考えられた。

中学生のキャリア発達の様相は、その時代に合わせた社会適応の仕方で違ったように見えるが、心の奥に抱える気持ちが精神的な健康に関わり、職業観、勤労観に関わる社会適応につながる部分は時代が変わっても共通していることが推察された。

-
- 9 天野洋子, 上田礼子, 桜井あや子, 安里葉子. 「中学生の対処行動に関する研究—悩みや 困ったことがある場合—」沖縄県立看護大学紀要. 2000, vol. 1, pp. 1-8.
- 10 斉藤ふくみ, 木下正江, 金田(松永)恵, 森よし江. 「中学生の悩みとその対処行動および学習との関連」茨城大学教育学部紀要(教育学). 2010, vol. 59, pp. 199-203.
- 11 佐々木貴美「自立活動の視点を取入れたキャリア教育に関する研究」筑波大学大学院人間総合科学研究科提出修士論文 2013年 pp. 57-61
- 12 木村一彦・米谷正造・小野恵「大都市における定時制高校生の生活習慣と健康意識」川崎医療福祉大学学会誌 vol.2 No.1 pp. 204-214 1992年
- 13 糸賀一雄・田中昌人「精神薄弱者の社会的適応」教育心理学研究, 1956, 3(4), pp. 16-25.
- 14 前掲論文 11 pp. 136-137
- 15 佐々木貴美 「中学生にとって大切なことは何か：自立活動と自己評価の観点からキャリア発達の様相を分析する」日本特殊教育学会第53回大会発表論文集 2015年

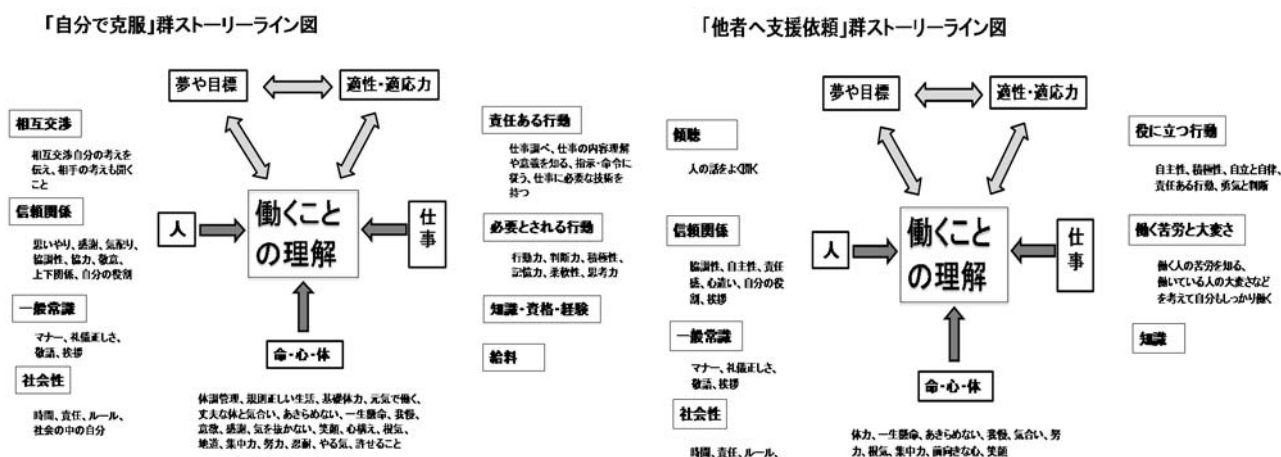


図1 中学生の苦手なことへの対処方略の違いによる生徒の意識

5 なぜ学校経営にキャリア教育と自立活動が大切なのか

平成27年8月に、2030年の社会とその先の豊かな未来を築くために、中央教育審議会教育課程企画特別部会から出された論点整理の中では、「全ての学校や学級に、発達障害を含めた障害のある子供たちが在籍する可能性があることを前提として、一人一人の子供の状況や発達の段階に応じた十分な学びを確保し、障害のある子供たちの自立や社会参画に向けた主体的な取組を支援するという視点が重要である」ことが指摘され、そのうえで、「通級による指導や特別支援学級の意義、それらの教育課程の取扱い、合理的配慮の提供」「障害の状態の多様化に対応した特別支援学校学習指導要領の改善・充実」「幼児児童生徒の発達の段階に応じた自立活動の改善・充実、これからの時代に求められる資質・能力を踏まえた、障害のある幼児児童生徒一人一人の進路に応じたキャリア教育の充実、知的障害のある児童生徒のための教科の改善・充実を図ることが求められる。」ことが挙げられている。

学校教育法第8章特別支援教育第八十一条では「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び中等教育学校においては、次項各号のいずれかに該当する幼児、児童及び生徒その他教育上特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒に対し、文部科学大臣の定めるところにより、障害による学習上又は生活上の困難を克服するための教育を行うものとする。」と明記されている。現行の自立活動編の中では、「小学校学習指導要領又は中学校学習指導要領解説（総則編）では、特別支援学級又は通級による指導において特別の教育課程を編成する場合に、「特別支援学校小学部・中学部学習指導要領を参考とし、例えば、障害による学習上又は生活上の困難の改善・克服を目的とした指導領域である「自立活動」の内容を取り入れる」という記述があり、インクルーシブ教育やユニバーサルデザインの授業には、通常の学習指導要領に含まれていない自立活動を重ねることを考え、小学校、中学校、特別支援学校に在籍する配慮を要する児童生徒を含めた自立活動の在り方を検討する時期が来ている。こうした現状を踏まえ、川崎市における通常の学校や特別支援学校での自立活動の指導や教育課程に関する現状と課題を明らかにすることには意義があると考えられる。

平成28年度から障害者差別解消法が施行され、それに基づく合理的配慮が法的義務になったことにも伴い、今後のインクルーシブ教育を踏まえると、小学校や中学校の学習指導要領から分離された自立活動を学校教育全体に浸透させるような柔軟な教育課程の編成が求められる。教育課程の編成は学校長の責務である。児童生徒の将来を見据えて、合理的配慮の一つとして自立活動の概念を理解し、その観点を取り入れた授業の工夫をもとにキャリア教育を軸とした学校経営の視点から教育課程の編成や、特別支援教育に関わる専門性を高める方向性について検討することが必要ではないかと考えた。

そこで、以上の理由から、次のように研究主題を設定した。

自己を見つめる力を伸ばすキャリア教育と自立活動

—各教科等に自立活動の6区分と合理的配慮を意識して取り組む学校経営の視点から—

II 研究の内容

1 研究の目的

- (1) 学校全体で各教科等に自立活動の6区分を意識した授業の工夫をすることによって、自己を見つめる力を伸ばすキャリア教育の教材や言葉かけを検討する。
- (2) インクルーシブ教育に向けて一人一人のニーズに合った指導と支援ができる特別支援教育の専門性を高める学校経営のプロセスを明らかにする。

2 研究の意義

特別支援学校では自立活動が教育課程に位置付けられ、様々な実践研究が積み上げられているが、通常の学校では、実践事例が非常に少ない。福島県立川俣高等学校の実践研究（教育課程研究）¹⁶ではホームルーム等を使い、自立活動の「健康の保持」「心理的な安定」「身体の動き」「コミュニケーション」の項目を取り入れた教育課程を編成し、学校生活への適応力が向上する研究がされた。神奈川県立田奈高等学校（教育課程研究）¹⁷では、自立活動の「健康の保持」「心理的な安定」「コミュニケーション」に焦点をあて、「情報リテラシー」や「生活研究活動」という授業を設定し、高校生活への適応やよりよい生活習慣の定着に成果を上げた。

中学生のキャリア形成には、「自分のよさや変化に気づく」¹⁸というキーワードとともに、自立活動の6区分に基づいて自立活動を行うことが生徒の社会自立にむけて大切な教育活動となり、自己を見つめ、様々な障害や困難を改善・克服する力は障害の有無に関わらず、重要な視点であると考えられる。

木村・米谷・小野（1992）の研究¹⁹では、生活習慣と健康の関係を知る手がかりとして、生活時間調査、自覚症状調査などについて生徒自身が自分の健康の評価を行い、自分の問題点を明らかにしていくことが有効な手段となり、不健康な自覚症状をもつ生徒には個人への指導を慎重に行うことを指摘している。社会性と健康意識による自己管理スタイルが職業意識に影響を与える²⁰という結果もあり、一人一人に応じた教育活動である自立活動の6区分として「身体の動き」「健康の保持」「心理的な安定」はキャリア教育の中で重要な位置を占めると考えられる。また、健康生成論の中核概念であるSOC（sense of coherence）（首尾一貫感覚）は困難や問題解決の際の感じ方や考え方によって健康の保持に影響を与えることが知られているため、SOCが教職員の資質向上に関連し、そのような教師や管理職の資質が生徒に反映することも考えられる。つまり、自立活動の指導者の資質が児童生徒の教育活動に影響を与えるとすれば、SOCと自立活動の専門性や特別支援教育における指導力との関連を明らかにすることが一人一人に応じたキャリア教育として各教科等と自立活動に関する教育課程の編成上の課題を明らかにすることにもつながると考える。

16 福島県立川俣高等学校『平成19年度（第3年次）文部科学省指定研究開発学校研究開発報告書』2007年 高等学校における発達しょうがい（LD）、注意欠陥多動性障がい（ADHD）、高機能自閉症等の生徒の教育的ニーズに対応した指導の在り方と、幼・小・中・高等学校一貫支援体制整備についての研究開発

17 神奈川県立田奈高等学校『平成22年度（第3年次）文部科学省指定研究開発学校研究開発報告書CD-ROM版 2010年 高等学校において一人ひとりの教育的ニーズに対応した指導のあり方に関する研究—高等学校における「かながわの支援教育」の具体的展開—

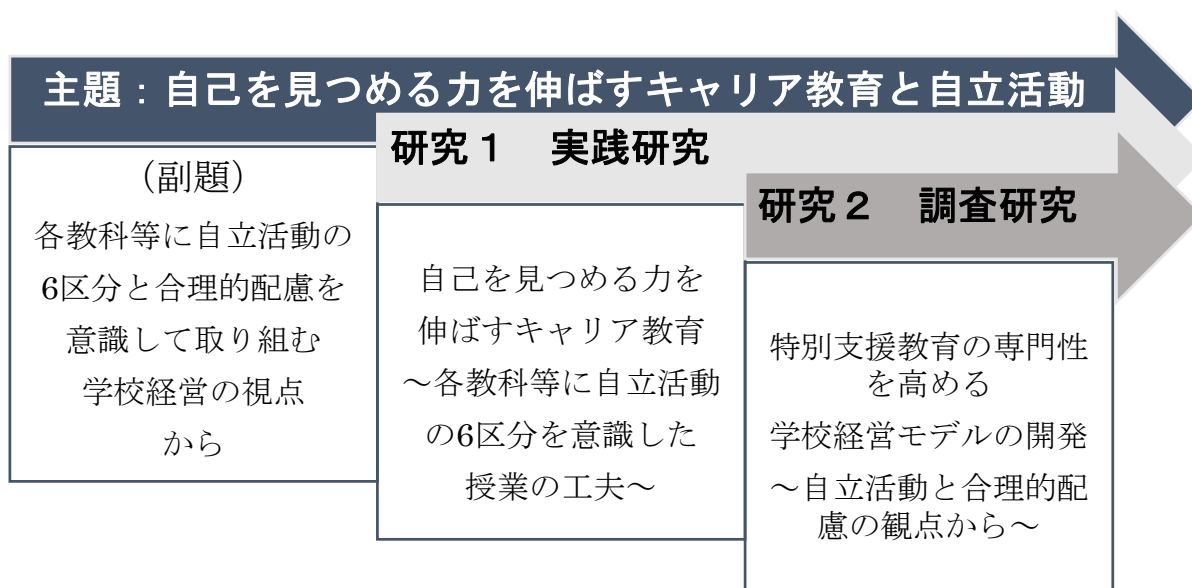
18 宮崎大学教育文化学部付属小・中学校特別支援学級『研究紀要33号』pp.50-53 2011年

19 前掲論文12

20 佐々木貴美「中学生・高校生の自己評価のあり方とキャリア教育との関連—特別支援教育からのアプローチ」日本教育心理学会第56回総会発表論文集 2014年

3 研究の方法・構成・仮説

研究方法は、仮説を設定し、研究1として実践研究、研究2として調査研究の2部構成とする。



仮説：自己を見つめる力を伸ばすキャリア教育において、子どもと教職員のキャリア発達は相互に影響し、子ども本人のニーズに合った指導や支援における特別支援教育の専門性を高めるプロセスには、管理職や教職員の資質と学校経営の影響を受ける。

4 研究の実際その1

研究の目的：学校全体で各教科等に自立活動の6区分を意識した授業の工夫をすることによって、自己を見つめる力を伸ばすキャリア教育の教材や言葉かけを検討する

研究の方法：先行研究の実践例をもとに、各教科等に自立活動の6区分と合理的配慮を意識した授業例の作成を行う

研究1 自己を見つめる力を伸ばすキャリア教育 ～各教科等に自立活動の6区分を意識した授業の工夫～

(1)「自立活動を意識した授業」とは？ —6区分を意識して「見える化」「わかる化」「一体化」— 一人一人の学習課題を自立活動の6区分26項目の観点から評価と支援を一体化すること

自立活動の目的は「様々な障害や困難を改善・克服する」ことである。そのために6区分26項目の学習事項がある。聴覚障害があれば、補聴器の使用方法を習得する、視覚障害があれば弱視レンズを使用できるようにしたり、歩行訓練をしたりする、服薬をしていれば、薬の管理や体調管理などができそうな力を育成することが自立活動で行う内容である。障害の有無に関わらず、合理的配慮に基づき、児童生徒にとって苦手なことや今できないことについて教師が自立活動の6区分の学習事項を意識し、それらを網羅的に取り入れた指導に取り組み、児童生徒が練習したり、気持ちを高めたり、考えたりすることによって社会自立に向けて生きていけるような授業を目指したいと考えている。つまり、6区分26項目の観点から授業を分析したり、子どもの課題を把握・分析したりして、授業の中で意識的にアプローチする方略として、「見える化」「わかる化」「一体化」を重視したい。

(例) 小学校2年生算数「長さ比べ」

6区分26項目の観点から授業を分析したり、子どもの課題を把握・分析したりして、授業の中で意識的にアプローチする。

(例) 小学校2年生 算数 「長さ比べ」 手指機能の操作性が高く、概念学習に関わる単元

●発達性協調性運動障害がある場合：自立活動の観点 “身体の動き”

○定規の扱い（片手で固定し、片手で鉛筆をもつ）→手指の巧緻性

○定規で線を引く（片手で固定し、片手で鉛筆を持ち、定規のへりにそって、鉛筆の芯をあてながら、目盛りも見ながら、横に滑らせる）→目と手の協応動作を伴い「一体化」。
（工夫）定規を固定して、用紙を定規の下に挟めるようにする。

●見えにくさへの対応：自立活動の視点 “環境の把握”（代行手段の活用）

（工夫）定規の種類→黒地に白の目盛り、目盛りの間隔を広くする等の工夫で「わかる化」。

●長さの概念の獲得：自立活動の視点 “環境の把握”（概念の形成）

（工夫）体感を伴う距離を計測する体験、触覚での距離測定、見えない距離をスズランテープで見せる等の工夫で「見える化」。

(2) 「自己を見つめる力」とは？

「自分の頭、体、心を感じて、言語・非言語を問わず、受容・表出する力」

自立活動は、その児童生徒にとってある事柄ができるようになれば「学習や生活がもっと楽になる」「よりよく生きていくことを目指した主体的な取り組みを促す教育活動」²¹となるものである。

そこで、本研究では、障害や困難を改善・克服する力を発揮するために「自己を見つめる力」を、「自分の頭、体、心を感じて、言語・非言語を問わず、受容・表出する力」と定義した。

(例) 中2「中学生にとって大切なことを考えよう」(道徳・自立活動)²² 特別活動でも授業可能。

先輩からのアドバイスプリントとチェックリストの活用による「自己を見つめる力」の育成。

①チェックリストで学校生活や現状の自分の心情を評価し、レーダーチャートや棒グラフで表現し、見えない心情をグラフ化することによって自分の状態を客観視してみる。

→自分の感覚とグラフから感じる自覚は違う場合があり、気づきや発見がある。

<注意事項>チェックリストの活用は「自己を見つめる力」の一つではあるが、児童生徒の回答の信頼性については、日常の教師の観察と比べて慎重に読み取らなければならない。チェックリストは心理測定のため、児童生徒のその時の心理状態に大きく影響されるので、子どもの見取りについてチェックリストに惑わされないように注意しなければならない。

②自分への気づきを得られた後に、将来の自分の姿を見据えて、先輩からのアドバイスプリントを読んで、現在の自分の生活を振り返り、今後の前向きな生活目標を考える時間を設ける。

→先輩からのアドバイスがリフレーミング効果になり、気持ちが楽になり開放される。

(3) 自立活動6区分と合理的配慮の授業例

— ユニバーサルデザインの授業を目指して「見える化」「わかる化」「一体化」—

小学校1年生～中学校3年生までの通常の学級と特別支援学級の生徒を対象に「自己を見つめる力」につながる各教科等の単元に自立活動の観点と合理的配慮を意識した授業例を作成した(表1)。

日常の学習活動の中で、どの部分が自立活動の指導項目としてあてはまるのか意識することから始め、その指導項目に沿って、一人一人の課題を見極めて、「見える化」「わかる化」「一体化」の工夫をすることによって、その子どもに適切な自助具や言葉かけを行うことを積み上げていけばよいと思う。

21 岡山県総合教育センター『自立活動ハンドブック—知的障害のある児童生徒の指導のために—』2015年p.4, p.50

22 前掲論文11 pp.138-175

表1 自立活動6区分と合理的配慮を意識した授業例

学年	教科・領域	単元・題材名	学習目標	学習内容	自立活動の6区分	合理的配慮	教材
小1	特別活動 図書館指導	学校図書館へ行こう	図書館の過ごし方を理解する	図書館で本を読んだり、読み聞かせを聴いたりして、想像の世界を楽しむ	コミュニケーション 心理的な安定	パーティーなどで仕切った場所、お話しをしてもいい場所など、児童の落ち着ける環境設定を行う	図書館で所有しているもの
小2	算数	長さくらべ	長さの概念を理解する 定規の使い方に慣れる	①おはじきを飛ばすことによって、距離を競う ②起点と終点を理解する ③定規の使い方に慣れる	身体の動き 環境の把握	・見え方によって教材の色を変える ・手指機能の向上のために適切な教材の種類や大きさにする	・白黒の定規 メモリの幅を変える。 ・おはじき、オセロ、段ボール、鉛筆
小2	総合的な学習の時間 (国際理解 国語、生活、 図工)	ニュージーランドの小学生と交流しよう	絵や手紙、写真を通して交流をする	ニュージーランドの小学生の生活を写真で見たり、話を聴いたりして、日本のことを知らせる絵や手紙を送り、お互いのことを理解する	コミュニケーション	・英語で書きたい児童には、簡単な日本語と英語文のリストから選択させる ・絵や写真など非言語で伝えるコミュニケーションの方法を教える	画材、カメラ 例文リスト
小2	音楽 特別活動	合奏と和太鼓	楽器に親しむ	鍵盤ハーモニカ、打楽器など自分のできる楽器を使ってみんなで音の変化を楽しむ	コミュニケーション 身体の動き	・自分でできる楽器を確認し、自分で選ぶ ・打楽器は指揮者の手の動きに合わせることを伝え、リズムを間違わせないようにする ・階名の必要な楽器には色付きシールを貼る	音楽室にある楽器
小3	理科(交流 および共同 学習)	昆虫の体のつくり	昆虫の体のつくりを理解する	昆虫の体は「頭、胸、腹」の3つの部分からできていることを知り、パズルを完成させる	環境の把握 コミュニケーション	・特別支援学級の生徒が答えられるように黒板に大きなパズルを貼って操作できるようにする	昆虫のパズル
小4	国語	ごんぎつね	ごんと兵十の気持ちの交流を理解する	ごんと兵十のコミュニケーションの方法、人間関係の形成の仕方、2人が置かれている環境の認知の仕方をイメージできる	人間関係の形成 コミュニケーション 環境の把握	・フローチャートによって人間関係の形成のプロセスを視覚的に提示する	ワークシート
小5	八ヶ岳自然 教室	八ヶ岳に行こう	班の人と一緒に協力して生活したり、活動をしたりする	生活のルールを理解したり、自分の健康管理を行い、係り活動を通して自分の役割を果たし、班の人と協力した活動を行うことによって達成感を味わう	6区分すべて	・健康管理、班内での役割を教員がきちんと把握し、こまめに言葉かけを行う	しおり 個別の生活 管理カード
小6	総合的な学習の時間	1日1000円で生活しよう	小学校で学んだ学習を生かして、自主的に生活を計画し、日常の生活スタイルを見直す	①1時間目から6時間目までの学校生活の計画を立てる ②1日の献立を立て、食費を1000円以内で計画する。校内アルバイトを探し、働くことによって1日の生活費が増える ③5時間目と6時間目は家庭科の調理実習とする ④1時間目に調理実習のための買い物に行く時間や与えられた学習課題を行う時間、アルバイトをする時間などを計画する。2時間目から～4時間目までを計画的にすこす	身体の動き 健康の保持 コミュニケーション 人間関係の形成 環境の把握	・計画を立てるためのワークシートを準備する ・計画を立てることが難しい場合は、見本をいくつか示し、その中から選択したり、見本を参考に自分なりに修正できるようにする ・校内アルバイトの場合は、挨拶や相手の都合を聞いてから行うため、あらかじめ校内に連絡しておく	・数種類の計画ワークシートや献立シート ・調理器具の工夫 ・調理の参考図書 ・教室の中にあるものを工夫して使う
小5 ～6	全教科	卒業論文を書こう	自由研究からテーマを設定し、研究内容を深めて卒業論文にする	自由研究で調べたことをもとにしてさらに深めたい課題を設定したり、友達の考えを取り入れたりして、個別の探究活動を行う	コミュニケーション 環境の把握	・教師が児童の個人記録カードを作り、進捗状況を把握する	個別の支援シート

(自立活動の観点で学習活動を捉える例)

小6「1日1000円で生活しよう」

- 身体の動き：教師が調理実習の時の道具を使う時の手指の動きや角度などを観察し、児童により使いやすい方法を指導し、練習できる機会を作る。 ➡一体化
- 健康の保持：栄養について考え、自分の健康管理の仕方を意識させる。 ➡見える化・わかる化
- コミュニケーション：校内で仕事探しをする際に、挨拶、言葉使いなどの練習の機会とし、その場で交渉する訓練の場として活用する。 ➡一体化

	学年	教科・領域	単元・題材名	学習目標	学習内容	自立活動の6区分	合理的配慮	教材
通常の学級	中1～3	委員会活動	図書室ゆるキャラコンテストを開こう	図書室のゆるキャラを募集を通して、図書室利用の活性化を図る	図書室利用の活性化を図るためにゆるキャラ募集について企画運営をする	コミュニケーション 心理的な安定	クラスでの呼びかけに不安がある場合は、「担任に相談⇒日にちを決定⇒話す内容を原稿にして練習する」という手順についての言葉かけを丁寧に行う	ワークシート
	中1・2	書写・美術	文字をデザインしよう	小筆の文字に親しむ	字体について学び、自由に表現する楽しさや小筆の感触を楽しむ	身体の動き 心理的な安定	・筆ペンの持ち方、動かし方を観察し、生徒の書きやすい方法を支援する ・文字デザインの見本を用意する	筆ペン 半紙
	中2	道徳	中学生にとって大切なことを考えよう 22	1-(5) 自己を見つめ、自己の向上を図るとともに、個性を伸ばして充実した生き方を追求する	「自分の人生は自分で切り開こう」 今の自分とこれからの自分～先輩からのアドバイスを聞いて、自分を見つめる～ チェックリストと先輩からのアドバイスパ rintによって自己内対話を中心として、将来の目標を考える	健康の保持 環境の把握 人間関係の形成 心理的な安定	・一人一人の考える時間を保障する ・表情をしっかり観察する レーダーチャートの記入方法に間違いがないか机間指導して確認し、言葉かけをする ・プリントへは記述する量を本人のかける量にする	ワークシート 教師の人生の振り返りを紙芝居仕立てにしたフリップ
	中2	特別活動	中学生にとって大切なことを考えよう (引用文献11を参考に授業開発)	(2) 適応と成長および健康安全 ア思春期の不安や悩みとその解決 イ自己及び他者の理解と尊重 ウ社会の一員としての自覚と責任 エ望ましい人間関係の確立 キ心身ともに健康で安全な生活態度や習慣の形成 (3) 学業と進路 オ主体的な進路の選択と将来設計	「人生何が起こるかわからない～棚からぼた餅編～」 担任からの棚からのぼた餅の話、チェックリスト、友達との話し合い、先輩からのアドバイスパ rintによって日常生活を振り返り、楽しく豊かな生活を送る生き方を考える	心理的な安定	・班内での話し合いが進まない時は教員と一緒に話し合いに参加する ・棚からぼた餅の話がないときは、「ぼた餅カード」をめくり、それを話す ・プリントへは記述する量を本人のかける量にする	教師のぼた餅話のPPT ワークシート ぼた餅カード
特別支援学級	中1	総合的な学習の時間 自立活動	ビデオ発表にチャレンジしよう	地域見学したことを発表する	幼稚園の見学に行き、インタビューしたことをフリップにまとめ、ビデオで発表する	人間関係の形成 コミュニケーション 環境の把握	・練習風景をビデオに録り、それを見直し、話し合いをすることによって、自分で気付いたことを次の練習に生かすようにすることを繰り返す。 ・発語のない生徒、発声に課題のある生徒は自分の表現できる方法で練習する	ビデオカメラ 画用紙 マジック
	中2・3	道徳 自立活動	中学生にとって大切なことを考えよう 22	①1-(5) 自己を見つめ、自己の向上を図るとともに、個性を伸ばして充実した生き方を追求する。 ②一人一人の自立活動の目標	「自分の人生は自分で切り開こう」 今の自分とこれからの自分～先輩からのアドバイスを聞いて、自分を見つめる～	健康の保持 環境の把握 人間関係の形成 心理的な安定	自立活動の一人一人の目標を達成できるように対話する (例) 高校生になるためには今何をすればいいかな？ 先輩と同じところと違うところはどこ？ 修学旅行先で自分で管理しなければならないことは何？	ワークシート
	中1・2・3	生活単元学習 (総合的な学習の時間、社会、数学、職業家庭学級活動、自立活動)	科学館へ行く	社会：神奈川県の様子を知る 数学：時間と時刻を理解する 職業家庭：職場体験を通して仕事の役割について理解する 特別活動：集団行動をする 自立活動：一人一人の自立活動の目標	①グループで科学館へ行く交通機関を知らべ、計画を立てて、協力して行動する ②3年生は職業体験をし、そこで学んだことをワークショップとして下級生に教える	人間関係の形成 コミュニケーション 環境の把握 心理的な安定	・全員がワークショップに参加できるように科学館と連携し、学習内容の打ち合わせを行う	時刻表 ワークシート タブレット
	中1・2・3	生活単元学習 (総合的な学習の時間、学級活動、自立活動)	影絵をしよう	①学級全体で協力して自分の役割を意識し、発表会に臨む。 ②一人一人の自立活動の目標	①影絵劇団の人から教えてもらう ②自分に適した役割を自己選択する ③練習風景をビデオで見ることを通して客観視できるようにする	身体の動き コミュニケーション	・練習風景をビデオに録り、それを見直し、話し合いをすることによって、自分で気づいたことを次の練習に生かすようにすることを繰り返す ・手で影絵を作ることが難しい場合はペーパーサートにする	ホワイトボード、白い布、フラフープ、LEDライト、プロジェクター 影絵ビデオ
中1・2・3	自立活動	朝の会・帰りの会・朝自習	①みんなの前で話をする ②一人一人の自立活動の目標	①1日の出来事を把握する。 ②ストレッチや動作法、静的弛緩誘導法、読書、自由学習などを行う	健康の保持 身体の動き 環境の把握 コミュニケーション 人間関係の形成 心理的な安定	①朝の会や帰りの会を通して、儀式的行事に慣れる ②一人一人の課題に応じて、じっくり取り組む	進行シート ストレッチマット、バランスボール 図書など	

(4) 有効な手立て・教材・授業方法

①先輩からのアドバイспリント

⇒中学生の場合、高校生からの言葉は、同じ悩みに気付き安心したり、アドバイスとして受け取ったりできる効果がある。小学生の場合、中学校入学前に先輩から学校生活について聞いておくと見通しが立ち、中学校生活に希望が持てる。先輩からの言葉が「フィード・フォワード情報」となる。

②体験や経験したことがある内容が想起しやすい絵本や読み聞かせ

⇒小学生の場合、体験や経験を想起し、それを話すことによって心の中で醸成される効果がある。

③手紙を書くこと

⇒人に自分の言葉を伝えるときにはよく考えてから言葉を選んで書くので、自然と自分の心の中にある言葉を見つめることになる。

④作品を通した気持ちの振り返り

⇒作品等（図工や美術での作品、国語での詩や作文等）には自分の気持ちを投影しているため、それを言葉で語ることは作品を通して客観的に内面を見つめることになる。

⑤自己評価チェックリストのグラフ化

気持ちは形としては見えないので、数字

表2 授業前と授業後の生徒の気持ちの変化

によってグラフ化し、「見える化」することによって、主観的な思いを客観的に見つめることができる。

⑥対話型の授業

⇒少人数で話しやすい雰囲気があるとコミュニケーションの苦手な児童生徒であっても慣れてくると気持ちを表現できるようになる。

⑦内省型の授業（中学生の場合）

⇒発達段階として話をするよりも自分の中でもやもやした感情と向き合うこともこの時期の特徴であり、じっくりと考える時間を取るのが、今までにない気づきを得られることもある(表2)²³。

⑧一人1分言葉かけ

⇒授業中の発言や担任の先生と話ができなかった場合に、休み時間や放課後などを利用して、児童生徒の課題達成に向けたヒント「フィードフォワード情報」となる言葉かけがあると、その言葉に児童生徒の心は反応して、行動が変わることがある。

	授業の最初	授業後
今までの考え方を確認	自分を知ることは大切だ	高校だと自主的な活動が増えるからやっぱり、自分を知ることは大切だ
	もうそろそろ、あとちよい、将来について詳しく考えなきゃー。	あー、やっぱり、だいたい合ってたなー。
	未来はなるようになる	未来はなるようになる
	夢に向かって日々努力して行動力を身につける	夢に向かって日々努力して、行動力を身につけることは変わらない
	何事も努力が大事	何事も努力が大事
	多く勉強し、何事にも全力でやる	今も変わらない
	後悔しないように生きよう	後悔しないように生きよう
	中学生の時は勉強だけすればいい	中学生の時は、勉強だけでなく、人間関係、マナーなどたくさんを身につけることが大切
	とりあえず、目標が決まっていれば大丈夫	目標があっても夢を作りたい
	自分のことは自分だけでできるようにする	個性を大事にする。自分に甘えない。
今までの考え方から変化	勉強しておけば何とかなる	目標を持つことも大事だ できることをやるんだ
	何もなくていい	体力つけなきゃいけない
	とりあえず、目標が決まっていれば大丈夫勉強することが大切	勉強も大事だけど無理をしないことも大切
	特に、中学生に大切なことはあまりない	中学生ではいろいろなことをしっかりと学んだほうがいい。
	特に、中学生の時にやることはない。	中学生のときからやっていたほうがいい。
	将来何になるかはそのときになってからでいい	中学校生活から努力しよう。
	好きなことを伸ばして頑張ればいい。	いろんなことを勉強して、あらゆる可能性を広げて生きたい
	中学生で大切なことって何？	頑張ることが大切
	とにかく勉強することだ	もちろん、勉強もそうだが、人間関係や自立性も大事になってくる 中学校での取り組みなどしっかりして、これから生きていく
	何も考えてなかった	将来のために、人の前でしっかり話せることが大切だ
中学生と小学生の違いはあまりない	中学生は将来に向けて、小学校の時は違う	
中学生で大切なのは、勉強と上下関係、精神面の向上だ	勉強だけでなく、運動、一般常識を身につけること	
夢に向かって進むべき道はやっぱり自分の頑張り次第だ	頑張ることは必要だし、自分の考えは自分で決めなければいけない。	
中学校は将来いい職業になるために、いろいろなことを勉強する場だ	高校の試験に面接があることから、自己表現などを勉強する場だ	
自分は後悔するような道は歩みたくない	人に堂々とと言えるような道を歩みたい	

23 前掲論文 11 p. 160 中2の通常の学級で実施した道徳の授業での生徒がワークシートに記入したものである。

5 研究の実際その2

研究2 特別支援教育の専門性を高めるための学校経営モデルの開発 ～自立活動と合理的配慮の観点から～

研究の目的：川崎市における自立活動に関する現状と課題について調査し、自立活動と合理的配慮の観点からインクルーシブ教育に向けて一人一人のニーズに合った指導と支援ができる特別支援教育の専門性を高める学校経営のプロセスを明らかにする。

研究の方法：

- (1) 調査課題 自立活動に関わる指導や教育課程の編成のための現状と課題に対する調査
- (2) 調査の目的 ①川崎市における自立活動の充実に向けた現状と課題を明らかにする。
②特別支援教育における専門性を高め教育課程の編成に資するモデルを構築する。
- (3) 調査の方法

- ① 調査対象 川崎市総合教育センター職員、川崎市立小学校・中学校・特別支援学校の管理職
- ② 調査時期と調査対象者
ア 本調査1 平成27年12月21日～12月25日 川崎市総合教育センター職員
イ 本調査2 平成28年2月3日～2月15日
川崎市立小学校、中学校、特別支援学校の管理職
- ③ 調査内容 紙面の都合上、調査用紙の主要項目のみを資料1として掲載した。

資料1 調査項目

1(1)年齢 1(2)性別 1(3)校長職経験年数 1(4)特別支援学級経験 1(5)特別支援学校経験
1(6)教育行政職経験 2 SOC 尺度 3(1)自立活動の理解 3(2)自立活動の必要性 3(3)特別支援教育において学校経営で大切にしていること 3(4)一人一人の進路に応じたキャリア教育において学校経営で困っていること 3(5)特別支援教育の校内体制の状況 3(6)キャリア教育で育てたい力を促進するために障害ごとに自立活動の項目で必要な指導事項 3(7)自立活動と合理的配慮に関わる校内体制の現状 3(8)自立活動に関わる特別支援教育の指導力 3(9)校内研修で大切な観点 3(10)各教科等に自立活動を意識した授業の工夫（仮想事例）
※3(10)の仮想事例に対する授業の工夫については「校長先生の授業アイデア集」としてセンター研究報告会に資料として配布した。

- ④ 分析方法 記述統計、 χ^2 検定、共分散構造分析、計量テキスト分析（共起ネットワーク分析）
解析ソフトには、HAD15、SPSS22、Amos22、KHCoderを用いた。
- ⑤ 回収結果と分析基準
ア 調査用紙配布数と回収率（2月17日現在）
センター職員 35部配布 回収35部 回収率100% 小学校 113部配布 回収80部 回収率70.8%
特別支援学校 10部配布 回収10部 回収率100% 中学校 52部配布 回収29部 回収率55.8%
- イ 分析対象基準
- ・記述統計では、未回答や回答不備等については「未回答」としてカウントし、管理職109名を対象に回答人数を集約した。特別支援学校管理職は参考資料とした。
 - ・回答の信頼性を担保するために、2、3(7)、3(8)、3(9)で未回答や回答不備等に該当しなかった小学校・中学校の校長職83名について、 χ^2 検定と学校経営モデル構築の有効対象とした。

(4) 調査の結果

① 1(4) 特別支援学校・学級の経験の有無と 3(1) 自立活動の理解 (センター職員 35 名・管理職 83 名)

χ² 検定の結果、特別支援学校・学級の経験が無い場合、児童生徒や他の教員に指導できるという回答数が有意に少なく、逆に言葉だけ知っているという回答数が有意に多かった。特別支援学校・学級の経験がある場合には児童生徒に指導できるという回答数が有意に多かった。この結果から、特別支援学校・学校の経験があるほうが自立活動に対する理解や指導に自信がもてるということが示唆された(表 3)。

表 3 学習指導要領自立活動の理解

	1 児童生徒に指導可	2 教師の指導助言可	3 自信なし	4 言葉は知っているが指導内容は知らない	5 初めて知った	6 未回答	合計
特別支援教育経験の有無	有 △ 14	11	7	7	0	1	72
	無 ▽ 12	▽ 10	22	△ 24	3	1	40
	未回答 1	△ 4	1	0	0	0	6
合計	27	25	30	31	3	2	118

クロス表 (△は有意に多い、▽は有意に少ない) χ²=20.544 df=10 p<.05

② 3(2) 自立活動の必要性 (センター職員 35 名中必要 35 名) (管理職 109 名中必要 104 名未回答 5 名)

回答者の 96.5%が通常の学級でも自立活動が必要であると考えていた。代表的な理由として、「困難を少しでも減らし発達を促す」「社会的自立のための基礎だと考えているから。」「通常の学級の子ほど目が行き届かないケースがあり、自立活動の位置づけがあったほうが配慮できると思うから。」「子ども一人一人のニーズに合わせた指導は求められる」「自立活動に示される項目の視点は広く支援を必要とする子どもたちにとって大切であると思うから。」「キャリア在り方生き方教育にもつながるものである。」「今後、自立活動が必要な児童生徒がさらに増えると予想されるから。」など、社会的自立、キャリア教育、個に応じた指導の視点からの記述であった。

表 4 身につけさせたい力

③ 身につけさせたい力 (センター職員のみ)

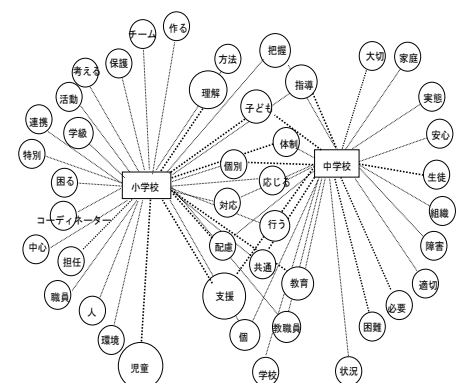
記述内容を自立活動の 6 区分とキャリア教育の観点によって分類すると、「人間関係の形成」に関わる記述が多く、「心理的な安定」と「プランニング能力」に関わる記述はなかった(表 4)。自立活動とキャリア教育の項目には関連から、一人一人に応じたキャリア教育と自立活動の指導内容を具現化することが今後の課題であると思われる。

自立活動の区分	キャリア教育の内容	センター職員の言葉(同様の意味は統合した)
人間関係の形成	自己理解 自己管理能力	その子の個性が生きような力 自分の持てる力の良い部分についてさらに伸ばす力 個性、自信(自尊心)の醸成 自己肯定感を育むこと
	人間関係形成 社会形成能力	皆と協調して活動していこうとする力(気持ち) 自分に対する各対応について感謝する力(気持ち) 環境(人、もの、こと)とあたたく関わる力 人との距離感 他の人の立場に立って考えること 他者と関わる力・人間関係の形成 集団の中で生活していく力 社会性の基盤を身に付けること 困っていることを相手に伝える力 人への伝え方
コミュニケーション		分からないことを聞く力(解決しようとする力) 自分で選択できる力 年齢に応じた知識 社会の中で自立して生きていく力
環境の把握	課題対応能力	
健康の保持・ 身体動き		身辺自立 日常生活を一人で送れるような力

④ 指導主事が指導助言する場合に困ること (センター職員のみ)

「チーム援助の方法」「児童生徒への理解の仕方の相違があるとき」「学級担任と児童生徒・保護者との関係」「児童の困り感の理解や共有」「指導助言をする場合の根拠や伝え方」「児童生徒による支援の多様化」に関することが中心であった。

⑤ 3(3) 管理職が特別支援教育において学校経営で大切にしていること



テキスト分析と代表的な記述

- 一人一人の子どもの多様な価値を評価して居場所を作ること。
- 一人一人の児童について十分に理解すること。その理解に基づき、見えてきたその子の持つ困難性について、担任はもとより、組織として支援を進めることのできる体制づくり。
- 困り感を子ども、保護者、担任等から聞き、児童支援コーディネーター中心に学校全体でどう育てていくかを話し合い、成長の一助とすること。
- 担任や同学年を組む学年主任の人選。児童支援コーディネーターを中心とした支援体制。
- 全教職員が共感的理解をすること、情報交換の場を設定する。
- 受容的な学級を作る。ニーズに即した支援と指導。
- 集団中での共働・共生の意識と実践。
- 個々の特性に応じた指導ができる環境の整備。適切な指導を行うための職員の資質、力量の向上(研修等の実施)。
- 障害のある子どもの教育に当たってはその障害の状態に応じて可能性を最大限に発揮させ、将来の自立や社会参加のために必要な力を培い、一人一人の教育的ニーズに応じた指導を行っていくことが大切。
- 障害や困難がある生徒が安全・安心に過ごせる学校は 誰もが安全で安心して過ごせる学校である。
- 教員の共通理解として「誰もが見えにくい困難を抱えていること」を前提として、そのことに思いを馳せる必要があること。

図2 共起ネットワーク分析 (出現語数4回以上) 管理職109名

⑥ 3(4) 管理職が一人一人の進路に応じたキャリア教育において学校経営で困っていること



テキスト分析と代表的な記述

- 特に困ることはない。
- 担任一人では対応しきれないこと。専属のコーディネーターも一人なので配慮児が複数いるとじっくり向き合えない。高校のように副担任がほしい。
- 集団学習が適さなくなっている子を学級という集団で育てなければならないことと自体に無理があるため、真に効果的な指導助言ができない。
- スクールカウンセラー、特別支援教育センター職員のような専門家の意見の受けを得る必要があるが、すべてのケースについて、その手続きが踏みにくく、後手にまわってしまう。
- 他の児童との違いやその子の様子を担任がどれだけ理解できているか。
- 専門的な知識を充分蓄えた上での指導助言。一人一人の生徒への柔軟な見取り。
- その子に応じた適切な進学先の情報が少ないこと。(また進学先の幅が狭いこと)
- 学級担任が一人一人の進路に応じただけのキャリア教育を行う力が備わっていない。また担任一人で全てを担うのは難しい。
- 支援や配慮を必要とする児童の特性をよく理解とせず、周囲(全体)の行動に無理に合わせてしようとする教員が少なからずいること。
- 保護者は自分の子どもでもあり、多くはない子育ての経験から進路について考える。担任も相談の中でその思いや考えに同調しがちになることがある。子どもの生涯にわたる自立を促すためにも長期的視野に立って指導、相談が進められるよう伝えられているが、短期的な視野しかかたてない。
- 人的・物的手だての配置指導の時間的余裕や子どもに応じた指導内容をどうするか。家庭や成育歴の問題をどう解決に導いていくか。
- キャリア教育、進路指導だけではない在り方、生き方の礎となるものを考える。
- 教員のキャリア教育に対する意識の違い。

図3 共起ネットワーク分析(出現語数3回以上)管理職109名

⑦ 3(5) 特別支援教育に関する校内体制と 3(7) 自立活動と合理的配慮に関する校内体制の状況

表5 特別支援教育の校内体制の状況²⁴

	1 全くそう思わない 2 あまりそう思わない 3 まあまあそう思う 4 とてもそう思う (数字は人数)				未回答
	1	2	3	4	
①校内委員会が機能している	0	4	60	45	0
②児童の発達障害等の困難・ニーズに関する実態把握は十分にできている	0	6	64	39	0
③特別支援教育コーディネーターや児童支援コーディネーターは十分活動ができている	0	4	50	54	1
④児童の指導の際に、個別の指導計画が役立つ	0	10	58	41	0
⑤児童の実態把握と指導にあたり、個別の教育支援計画が役立つ	1	9	55	43	1
⑥巡回相談員の活用が必要である	2	3	49	55	0
⑦専門家チームの活用が必要である	1	7	49	51	1
⑧教育委員会が主催する特別支援教育研修に教職員を参加させたい	0	4	55	50	0
⑨特別な配慮を要する児童の学習や生活をサポートする特別支援教育支援員が必要である	0	2	27	80	0

表6 自立活動と合理的配慮に関わる校内体制の現状

	1 全くそう思わない 2 あまりそう思わない 3 まあまあそう思う 4 とてもそう思う (数字は人数)				未回答
	1	2	3	4	
① 特別支援学級や通級指導教室、相談学級などで、時間割に位置付けて自立活動を定期的・実施している	2	19	49	26	13
② 学校全体として通常級の学級担任が自立活動について理解している	3	43	48	4	11
③ 教職員は障害のある児童への合理的配慮について具体的に理解している	1	43	43	11	11
④ 通常の学級に在籍する障害のある児童の「個別の指導計画」を作成し、その中に必ず自立活動の指導事項を設けている	9	36	44	8	12
⑤ 特別支援学級の児童の「交流および共同学習」の際に、全職員で児童の自立活動の目標を共有し、意識して取り組んでいる	5	41	41	11	11
⑥ 特別支援教育コーディネーターや児童支援コーディネーターは教職員や児童に自立活動に関する支援をしている	0	17	47	34	11
⑦ 自立活動の時間を確保できない	9	35	44	8	12
⑧ 自立活動を指導できる教員が少ない	3	26	48	19	13
⑨ 教科・領域の中で、個別の指導計画に基づいて自立活動を指導するためのノウハウがない	3	31	49	13	13
⑩ 学校全体としてどこまでを合理的配慮として行うべきか基準がわからない	3	32	49	14	11
⑪ 自立活動を行うための施設設備が十分ではない	3	25	43	26	12
⑫ 通常の学校生活では保護者や児童の個別のニーズに応じた自立活動の指導には対応できない	2	37	45	12	13
⑬ 自立活動の指導のための外部機関連携のしつみが十分ではない	2	31	52	12	12
⑭ 管理職が特別支援教育や自立活動の専門性を持ち合わせていない	2	32	51	10	11
⑮ 自立活動の指導の工夫のための校内連携のしつみが十分ではない	0	49	40	8	12
⑯ 学校全体として自立活動の必要性を認識していない	15	61	20	2	11
他に課題や問題点があればお書きください。					

⑧ 3(9) 管理職が重要視している校内研修の観点²⁵ (3つまで選択)

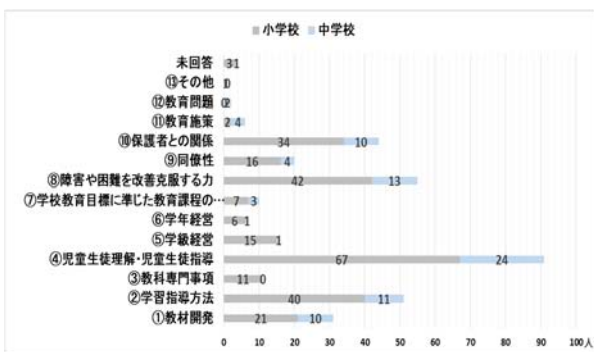


図4 校内研修の観点

⑨ 3(10) 管理職が各教科等に自立活動を意識した授業の工夫ができそうだと考えた教科等(1つ選択)

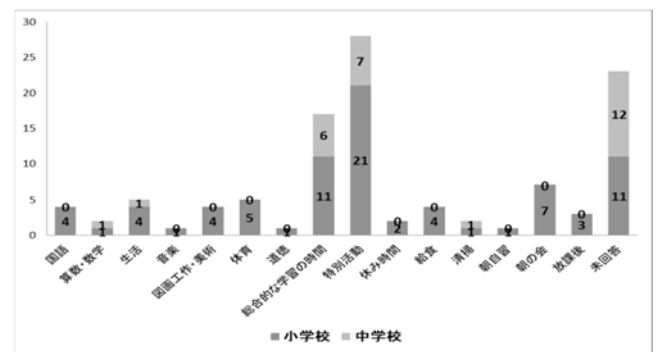


図5 自立活動を意識しやすい教科等

24 表5は、田部絢子、高橋智「私立小学校における特別支援教育の体制整備の現状と課題:全国私立小学校管理職・養護教諭悉皆調査から」東京学芸大学紀要総合教育科学系65(2)2013年pp.61-112より引用し、③は川崎市に合わせて一部改変した。
25 図4は浦野弘、佐藤修司「新任研究主任が抱く教職員の力量向上と校内研修会に関する意識の調査」秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要302008年pp.191-201より引用し、⑧を変更して使用している。

⑩ 3(6)障害ごとに重点的な指導事項として大切だと考える自立活動の指導項目

表7 キャリア教育で育てたい力を促進するために障害ごとに必要な自立活動の指導事項

	健康の保持				心理的な安定			人間関係の形成			
	①生活リズムと生活習慣	②病気の理解と生活管理	③身体各部の理解と養護	④健康の維持・改善	⑤情緒の安定	⑥状況の理解と変化への対応	⑦困難の改善・克服への意欲	⑧他者とのかかわり	⑨他者の意図や感情の理解	⑩自己理解と行動調整	⑪集団参加の基礎
発達障害	46	7	5	11	69	47	35	75	41	54	59
学習障害	34	7	3	8	38	20	58	34	18	43	31
視覚障害	28	24	35	13	15	17	52	31	14	20	18
聴覚障害	27	25	32	13	16	17	54	32	13	16	20
肢体不自由	37	22	53	23	16	8	49	30	6	15	14
病弱	49	56	39	52	15	11	46	35	10	18	21
知的障害	61	8	9	14	36	25	43	50	17	35	45
重度重複障害	61	19	22	28	36	13	40	41	16	22	18

	環境の把握				身体の動き				コミュニケーション						
	⑫保有感覚の活用	⑬感覚や認知の特性への対応	⑭代行手段の活用	⑮感覚の活用と状況把握	⑯概念形成	⑰運動・動作の改善・習得	⑱運動・動作のための補助手段の活用	⑲日常生活の基本動作の習得	⑳身体の移動能力	㉑作業での基本動作・巧緻性・敏捷性	㉒コミュニケーションの基礎	㉓言語の受容と表出	㉔言語の形成と活用の仕方	㉕コミュニケーションの選択と活用	㉖主体的なコミュニケーション
発達障害	6	11	3	7	3	3	0	22	4	7	51	18	9	21	44
学習障害	12	11	5	12	13	1	0	12	1	12	21	26	23	28	19
視覚障害	61	31	54	30	10	2	8	10	6	5	17	4	7	41	10
聴覚障害	66	32	50	27	7	2	6	11	4	6	22	10	6	42	12
肢体不自由	9	3	5	11	1	45	39	34	41	13	16	2	5	13	8
病弱	5	1	4	4	2	11	12	25	18	5	14	4	7	12	16
知的障害	4	2	4	9	16	4	4	36	5	18	35	25	22	26	31
重度重複障害	15	5	10	10	14	18	13	43	21	9	26	5	6	21	12

・表内の数字は項目を選択した人数である。
 ・複数選択を可とし、障害ごとに4~10個の範囲で選択するよう求めた。

【考察その1 (①~⑩)】

a 特別に支援の必要な児童生徒に対する管理職の思い

管理職が特別に支援の必要な児童生徒について、学校経営で大切にしていることや一人一人の進路に応じた支援については、共起ネットワーク分析を通して、小学校と中学校では共通の課題認識(図2・図3)のあることがわかった。全体的な記述の印象として、小学校も中学校も苦慮している様子が伺われた。小学校と中学校の大きな違いは、中学校では進路先の選択を3年間で決めなければいけないために進路指導の重要性を強く意識しているのに対し、小学校では進路に対するイメージにもよるが、「小学生から進路についてはまだ決められない」という率直な記述が見られた。

b 特別支援教育にかかわる校内体制と自立活動にかかわる校内状況について

自由記述でも障害のある児童生徒に対し、共感的な対応をする姿勢が記述されていたこともあり、特別支援教育に関わる校内体制(表5)については比較的体制が整っていると認識している管理職が多く、自立活動に関する校内状況(表6)については、自立活動に対する困り感を抱えている管理職が多い様子が見られた。校内研修の観点(図4)として、児童生徒理解・指導、障害や困難を克服する力、学習指導方法、保護者との関係などが上位を占めたことは、自立活動や合理的配慮への関心の高さが表れている結果となった。

c 障害に対するイメージと各教科等における自立活動に対する指導との関連について

障害特性に応じて指導する際の自立活動の指導項目(表7)の選び方については障害に対するイメージが反映されている結果が見られた。また、自立活動と合わせやすい教科等(図5)は特別活動と総合的な学習の時間が多かったので、行事等と関連を図りやすいこともあり、負担なく指導しやすいことが考えられる。したがって、今後、各教科等に自立活動の6区分を意識した授業の工夫を行う場合には、障害特性による自立活動の指導と障害特性に関わらない個別課題に対する自立活動の指導についても明確にする必要性が推察された。

⑪ 特別支援教育の専門性を高める学校経営プロセスモデルの検証

分析方法：2008年度の川崎市立学校の管理職に対する質的調査から得られた学校経営の仮説モデル

(図6)²⁶に本研究の調査項目の中から、3(7)自立活動に関わる校内体制の状況(表6)、2 SOC尺度²⁷、3(8)自立活動に関わる特別支援教育における指導力の自己評価(表8)の数値を当てはめて共分散構造分析を行う。その際、モデル作成については、2、3(7)、3(8)、3(9)で未回答や回答不備等に該当しなかった小学校・中学校の校長職83名で実施した。

表8 SOC尺度と自立活動に関わる特別支援教育の指導力についての集計人数(109名分の内訳)

● 2 SOC尺度 (7段階評価)	1	2	3	4	5	6	7	未回答
(A) 私は、日常生活に生じる困難や問題の解決策を見つけることができると思う(処理可能感)	0	2	1	15	31	44	16	0
(B) 私は、人生で生じる困難や問題のいくつかは、向き合い、取り組む価値があると思う(有意味感)	0	3	1	13	27	45	20	0
(C) 私は、日常生活に生じる困難や問題を理解したり予測したりできると思う(把握可能感)	0	2	2	27	39	35	4	0
● 3(8) 自立活動に関わる特別支援教育の指導力 (自作項目) (7段階評価)	1	2	3	4	5	6	7	未回答
① 障害特性に応じて指導助言ができる	3	12	19	34	25	10	2	4
② 各教科等での自立活動の指導の工夫について指導助言ができる	4	9	25	28	30	7	2	4
③ 保護者の要望に応じて相談に応じられる	2	5	6	27	41	18	6	4
④ 児童本人のニーズに応じて指導助言ができる	2	5	15	33	35	12	3	4
⑤ 学級集団の中で自立活動の指導助言ができる	3	8	14	35	28	12	5	4
⑥ 自立活動の指導について指導助言ができる	4	9	15	34	31	10	2	4
⑦ アセスメント能力は高いほうである	2	7	15	44	20	14	2	5
⑧ 合理的配慮に対応できる自信がある	2	10	15	36	31	10	1	4
⑨ 発達障害や様々な障害の特性について理解している	2	9	9	34	34	16	1	4
⑩ 特別支援学校学習指導要領解説自立活動編(幼稚園・小学部・中学部・高等部)を熟知している	15	26	17	29	12	5	0	5
⑪ コミュニケーション能力は高いほうである	1	1	3	27	36	25	12	4
⑫ 人間関係形成の能力は高いほうである	1	0	3	30	36	25	10	4
⑬ 自分を客観的に分析する力、情報処理能力など環境の把握に関する事象は得意である	1	1	3	35	36	24	5	4
⑭ 障害のある児童の身体機能や生理学的な機能について理解している	1	11	22	37	25	8	1	4
⑮ 心理的な安定を図るための技法を理解している	1	12	14	34	31	12	1	4
⑯ 障害に起因する健康への配慮について理解している	1	11	17	38	26	11	1	4

【分析結果と考察その2 (⑪)】

α 係数は、SOC尺度3項目(表8)が.886、自立活動に関わる特別支援教育における指導力16項目(表8)が.957、自立活動に関わる校内体制16項目(表6)が.870となり内的一貫性は高いので、これらの項目を用いて2008年度版(図6)の仮説モデルの具現化として共分散構造分析を実施した。

その結果、モデルの適合度指数がGFI=.940 AGFI=.896 CFI=1.000 RMSEA=.000と概ね良好な値となり、83名の集団においては、特別支援教育の専門性を高める方向性を示唆する学校経営のプロセスモデルが作成できた。学校経営に対し管理職の意識として首尾一貫感覚が適切に反映されれば、現状を的確に把握し、合理的配慮への対応ができるため、障害特性への指導助言や本人のニーズに応じた指導助言も可能になる。自立活動の理解は管理職の意識とは関係ないので、管理職が教員に対する校内研修や研究を充実させることにより、合理的配慮への理解が進むので教員の資質向上につながる。逆に首尾一貫感覚が適切でなければ、特別支援教育を核にした学校経営が難しく、自立活動、合理的配慮、障害特性への理解が進まないのも、本人のニーズに合った指導助言がされず、特別支援教育が進まないという

2008年度版を支持する結果となった(図7)。

【統計用語の説明】 α 係数は、尺度の信頼性を示す数値で0.8以上であればよく、0.9以上はかなり高い。モデルの適合度指数は、データの数値がモデルに適合しているかを見るもので、GFI、AGFI、CFIは0.90~1.00までの間にあると良く、論文によっては、0.8以上でもモデルとして採用するものもある。RMSEAは0.05以下が良く0.10以上は良くないのが一般的。モデル内の矢印(→)をパス係数と呼び、その横に表示されている数値は標準化推定値で影響力を示す。1に近いほど、影響力が強いと解釈する。統計の数値は、1以下の小数の場合、0.886=.886と表記する。

26 佐々木貴美 「支援教育に関する一考察」 横浜国立大学教育人間科学部特別支援教育専攻科ケース実践報告書.2008 p.92

27 戸ヶ里泰典「大規模多目的一般住民超向け東大健康社会学版 SOC3 項目スケール(SOC3-UHUS)の開発」東京大学社会科学研究所パネル調査プロジェクトディスカッションペーパーシリーズ2008年
https://ssjda.iss.u-tokyo.ac.jp/panel/dp/PanelDP_004togari.pdf

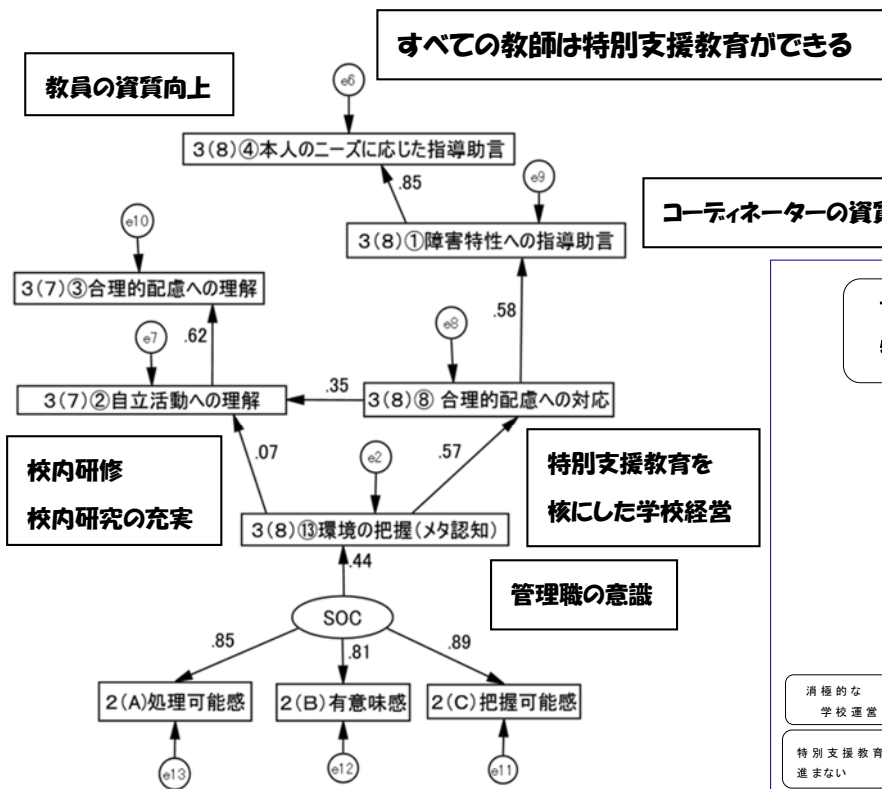


図7 2015年度版学校経営プロセスモデル

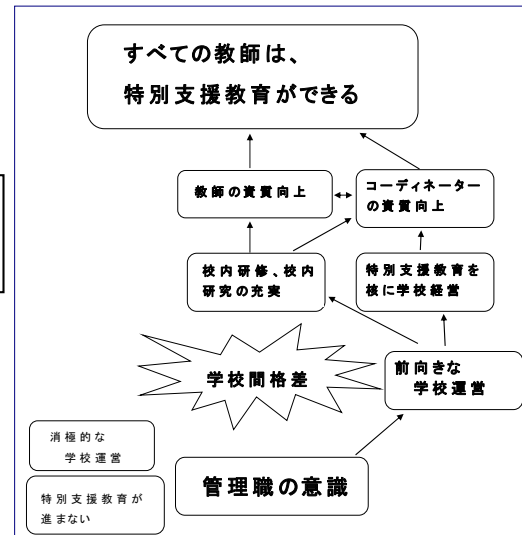


図6 2008年度版学校経営プロセスモデル

Ⅲ 研究のまとめ

1 研究から見えてきたこと

(1) キャリア教育として各教科等における自立活動を意識した授業を工夫することの意義

～1日一人1分の言葉かけで子どもは変わる！

フィード・フォワードでタイムリーならさらに Good!!～

キャリア形成は一人一人の経験や物事の捉え方によって個性的に発達していくものと考えられる。特に思春期は小学生から始まり、高校卒業後も続く。今回の管理職調査では、特別支援教育に対する管理職の意識の高さが伺われ、通常の学級では、一人一人に応じて教育課程を編成することはできないという状況の中で、どのように支援していくのかを模索していた。中学生は思春期の中でも嵐のような怒涛の時代であり、生徒も教師もその中で懸命に日々を過ごしている。だからこそ、「自立活動」のように一人一人の状況に応じて教育活動を考えることを通常の学校生活の中に取り入れることが大切であり、小学生から自立活動を継続していくことがキャリア発達を促進するものになるのだと思う。一斉指導の授業の中で、その児童生徒にとって、その時間に何を目標とするのか、何か一つでもできればよいとするのか、たとえその1時間内にはできなくても今が練習を重ねる段階のどのステージなのかを考えて次のステップへつなげるのか、ということを経験上の課題にすることは合理的配慮の一つであるとする。さらにその言葉かけが子どもにとってのフィード・フォワード情報であり、タイムリーであれば子どもの行動調整に効果的に働くはずである。

各教科等の授業の中には、自立活動の6区分26項目に適合する活動がある。例えば「定規の押しえ方(身体の動き)が上手になったね」「今日の調子はどう?(健康の保持)明日は遠足だね」など、1日一人1分という負担なく自立活動的な目標を達成できるための言葉かけをすることから始め、それを繰り返し、積み上げていくことが一人一人のキャリア発達を促すことになるのではないかと考える。

思春期のキャリア形成を考えるうえで、キャリア発達は生まれた時から途切れることなく続くものである。特に、小学校低学年での授業では遊びを導入しながら、その中で「身体の動き」を学習することはとても重要である。「身体の動き」が「健康の保持」「心理的な安定」に関連することが経験的にも感じる人が多い。低学年からの積み上げが大事である。体育科において、不器用だと言われている児童生徒の体育学習では自立活動の「身体の動き」を意識することによって一人一人に応じた自立活動の項目を評価に入れることが大切だと思う。また、「健康の保持」「心理的な安定」は保健学習にもつながる。自立活動の中で特に難しいのは「環境の把握」であり、それはメタ認知とも関係する。自己理解と他者理解は、自分の視点移動ができるかどうかに関わる。知的障害があるとメタ認知に課題を抱えることが指摘されているからこそ、低学年から「観察する」「比較する」「違いを発見する」「想像する」といった科学的な思考は一人一人の「環境の把握」を高める上で、言葉かけの仕方や教材の工夫が大事である。低学年では生活科の中で意識して自立活動を行い、理科や社会へつなげるような授業の工夫が求められる。「人間関係の形成」や「コミュニケーション」は社会自立のために大事な項目ではあるが、この部分に焦点化することにより逆にプレッシャーとを感じる児童生徒もいる。音楽は合唱や合奏を通して、間接的に人間関係の形成やコミュニケーションを体感できる学習活動である。「友達と仲良くしよう」「人には感謝しよう」という具体的な言葉ではなく、音を合わせることの気持ちよさや楽しさを感じられれば、心が開放されて自然と友達と仲良くなるだろうし、感謝の気持ちも生まれる。その場合に、楽器を演奏することには「身体の動き」が関わってくる。手指機能が十分ではないとリコーダーを演奏するのは難しく、「できない」ことや友達と音を合わせられない居心地の悪さだけが心に残る。そのときに、自立活動として、その児童生徒にとって何を目標とするのかを考えれば、リコーダーができるかできないという視点ではなく、言葉かけや授業の工夫が生まれる。

どの教科であっても、一人一人に応じた自立活動の指導事項は必ず存在する。そういう意識をもって授業の工夫をすることが、合理的配慮への意識を高めることになるのではないだろうか。

(2) 児童生徒のキャリア形成において通常の学校の教育課程に自立活動を取り入れる意義

～自立活動の専門性が高まれば特別支援教育の質は高まる～

現行の学習指導要領では、通常の学校の教育課程には自立活動はない。そのため、小学校や中学校の学習指導要領の総則に通級指導教室の児童生徒や通常の学級に在籍する支援の必要な生徒にも自立活動を取り入れた教育活動を考えることが明記されていても、特別支援学校とは違い、時間数の確保が難しいことや自立活動の授業の蓄積がないため、通常の学校教育では自立活動の認知がされていない状況なので、これから検討していかなければならないことだと思う。今回の川崎市立学校管理職の調査では、通常の学校でも自立活動を取り入れたほうがよいとする結果から、自立活動の観点から学習内容を分析し、授業実践を積み上げていくことによって、一人一人に応じたキャリア教育として学校教育目標を達成する教育課程の編成が可能になると思われる。真にユニバーサルデザインの授業を考えるならば、重度重複障害のある児童生徒と一緒に活動することができるような「オトナ学」²⁸ といった小学校や中学校の学習指導要領に自立活動を浸透させた授業の工夫するのはどうだろうか。通常の学校では、学級担任1名に対し30人以上の児童生徒に対応し、教える内容も多いので、そこに自立活動の指導事項を意識した教育課程を編成することには課題は多い。だが、学級担任個人の努力ではなく、教育課程の編成上に位置付けることによって、全校で意識した基盤づくりに取り組みやすくなれば一人一人の進路に応じて達成すべき目標に対して言葉かけができるようになると思われる。

28 前掲論文 7 藤田は『「人生の生き方を指導する」といった情緒過多に陥ることを避け、かといって『労働者育成』という矮小化の道も選ばず、しかもパターナリズムに偏することなくオトナになるプロセスを継続的に支援できるプログラム』の必要性と「オトナ学」という特設時間について提案している。

(3) 教師の「自己を見つめる力を伸ばす」キャリア教育は管理職の学校経営と教師自身の自己省察

キャリア教育は学校教育だけで完結するものではない。人間が生きている限りキャリア発達は生涯にわたって続く。児童生徒の「自己を見つめる力を伸ばす」ためには、まず教師自身が「自己を見つめる力」を伸ばさなければ子どもは育成されない。教師自身が育成されるためには管理職の「自己を見つめる力」がなければ教師も育たない。学校教育におけるキャリア教育は管理職のキャリア発達の在り方が問われていると考えるべきである。

藤岡完治²⁹は、『授業デザイン』を特徴づけるのは『フィード・フォワード』である。これは、『期待への調整』といえる。すなわち、あるべき状態をイメージしながらそれに向けてこれからの状態を合わせるように調整することである²⁵と述べている。教師は授業デザインを職務とするのであれば、管理職は学校デザインを職務とするはずである。管理職が教師に「フィード・フォワード」情報を与えて学校経営がされることが学校教育におけるキャリア教育ではないかと思う。

2 今後の課題

(1) 自立活動の専門性を高める研修

自立活動について知る機会や各教科等との関連で自立活動に焦点化された研修はとても少ない。学校経営のプロセス上に自立活動の目標の共有化が合理的配慮に影響し、障害特性や本人のニーズに合った指導助言ができるようになる研修が必要である。肢体不自由、聴覚障害、視覚障害については「養護・訓練」時代からの蓄積はあるが、知的障害や発達障害のための自立活動については明確なものがない。まず、肢体不自由、聴覚障害、視覚障害で行われている各教科等で自立活動を合わせた授業と通常の学級の授業を比較検討するような研修によって、通常の学級に在籍する支援の必要な児童生徒への合理的配慮について具体的な実践レベルで考えることが今後の課題である。

(2) 通常の学校での各教科等における自立活動 6 区分 26 項目を適応した授業の開発

— キャリア教育での授業力を高めるキーワードは「見える化」「わかる化」「一体化」—

本来自立活動は一人一人の個別指導として実施されるものであるが、通常の学級に在籍している支援の必要な児童生徒に対し、自立活動の指導項目を意識して授業の中で配慮することが学級全体に波及効果があると考えられる。自立活動の指導項目から具体的に授業開発ができないならばインクルーシブ教育は絵に描いた餅であり、支援の必要な児童生徒であっても通常の学級に在籍していると合理的配慮が受けられない状態が続いてしまう。各教員 1 人が自立活動の指導項目から 1 つの授業開発をしてそれを蓄積することが授業力を高めることにつながると思う。その環境を整備するのが管理職の役割である。キャリア教育におけるユニバーサルデザインの授業とはすべての子どもと一緒に授業を受ける時間を保障することである。そのときに大事なことは「見える化」「わかる化」「一体化」だと思う。

- 「見える化」とは、「視覚化」だけを意味するのではなく、「触覚化」「言語化」もその一つである。
- 「わかる化」とは、「腑に落ちる」という感覚である。「なるほど!!」「そうだったんだ!!」「ぴったりだ!!」という実感を伴うわかり方を示す。
- 「一体化」とは統合されたり融合されたりするような感覚であるが、個人の中での統合もあるが、一人一人違うものが一緒に活動することによる一体化もある。

インクルーシブ教育やユニバーサルデザインがお題目にならないような授業を工夫することが教師の職務であり、子どもに付けたい力を育成できるような学校環境を整えることが管理職の役割だと思う。管理職の学校経営の在り方がキャリア在り方生き方教育につながるのではないだろうか。

29 浅田匡 生田孝至 藤岡完治編著 『成長する教師—教師学への誘い』金子書房 1998年 p. 21

最後に、研究を進めるに当たり、ご支援、ご助言をくださいました講師の先生方、調査にご協力くださった川崎市立小学校、中学校、特別支援学校の管理職の皆様、川崎市総合教育センター職員の皆様に心より感謝し厚くお礼申し上げます。

【参考文献】

- 糸賀一雄著，糸賀一雄著作集行刊会編.『糸賀一雄著作集Ⅲ』 放送出版協会 1983年
- J. ウィニック著. 小林芳文，永松裕希，七木田敦，宮原資英訳
『子どもの発達と運動教育』大修館書店 1992年
- Antonovsky. A. Unraveling the Mystery of Health : How People Manage Stress and Stay Well. San Francisco: Jossey-Bass. 1987 (山崎喜比古，吉井清子，監訳. 健康の謎を解くーストレス対処と健康保持のメカニズム. 有信堂高文社) 2001年
- J. D. クランボルツ，A. S. レヴィン著. 花田光世，大木紀子，宮地夕紀子訳
『その幸運は偶然ではないんです！』ダイヤモンド社 2005年
- 清水裕士，村山綾，大坊郁夫. 「集団コミュニケーションにおける相互依存性の分析(1) コミュニケーションデータへの階層的データ分析の適用」電子情報通信学会技術研究報告 106(146), pp. 1-6 2006年
- 日本キャリア教育学会編『キャリア教育概説』東洋館出版社 2008年
- 加藤繁美『対話的保育カリキュラム(下) 実践の展開』ひとなる書房 2008年
- 坂爪一幸『衝動性と非行・犯罪を考える』早稲田教育ブックレット 学文社 2008年
- 小塩真司 『はじめての共分散構造分析 Amos によるパス解析』東京書籍 2008年
- スティーブ P. ロビンズ著 高木晴夫訳『新版組織行動のマネジメントー入門から実践へ』ダイヤモンド社 2009年
- 仙崎武，池場望・下村英雄・藤田晃之・三村隆雄・宮崎冴子編著
『キャリア教育リーダーのための図説キャリア教育』社団法人雇用問題研究会 2010年
- 佐々木貴美，鹿児島金衛，川間健之介「中学生・高校生の苦手なことへの対処方略とキャリア発達への影響」日本リハビリテーション連携科学学会第15回大会抄録集 2014年
- 樋口耕一 『社会調査のための計量テキスト分析』ナカニシヤ出版 2014年
- 藤田晃之 『キャリア教育基礎論ー正しい理解と実践のためにー』実業之日本社 2014年

【指導助言者】

筑波大学人間系教授 (川崎市総合教育センター専門員) 藤田 晃之
筑波大学人間系教授 川間健之介

【研究協力者】

川崎市総合教育センターの職員の皆様
川崎市立小学校、中学校、特別支援学校の管理職の皆様